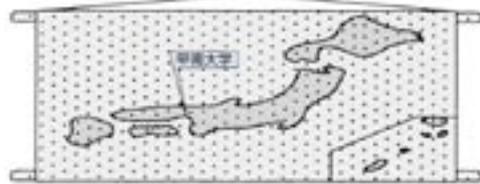


# Zephyr

〈第44号〉

ゼフィール・にしかぜ


<http://www.kilc.konan-u.ac.jp>

## 《特集＊大学での外国語学習を仕事に活かしている先輩たち》

☆所長からのメッセージ 現代に必要な国際感覚を養うために	胡 金定	1
〔英語〕 海外で働く先輩達から学ぼう 一人間の連帯感と外国語の意義	中村 耕二	2
〔ドイツ語〕 ドイツで働く先輩、日本でドイツ語を活かして働く先輩達	柳原 初樹	4
〔フランス語〕 「フランス語」と「英語」を使って〈国連職員〉として活躍する古我知晶さんへのインタビュー	中村 典子	6
〔中国語〕 高屋さん・伊藤さんの歩む道 中国語でがんばる先輩たち	石井 康一	8
〔韓国語〕 甲南大学で学習した韓国語を仕事に生かしている先輩たち	金 泰虎	10
〔日本語〕 留学体験を生かした先輩たち	富阪 容子	11

## 現代に必要な国際感覚を養うために

国際言語文化センター所長 胡 金定

日本の大学の外国語教育事情が変わりつつあります。かつては教養教育と位置付けられ、人気のない言語の講義を廃止する大学も目立ちました。近年は多様な世界観を養うという観点から、複数言語教育に力点を置く大学が増えてきました。甲南大学は創設者平生夙三郎の「世界に通用する紳士・淑女たれ」の方針に従い、現在に至るまで複数言語教育を堅持しています。国際言語文化センターは戦後の大学教育の中で教養主義的色彩が強かった外国語の教授法（訳読中心）から「学習者中心、双方向でコミュニカティブ」な（使える外国語）教授法に変えて15周年を迎えました。

「学習者中心、双方向でコミュニカティブ」な教授法とは、様々な専門分野で高度な専門性を持ちながら、同時に、目標言語の文化圏と日本の文化圏の直接の架け橋となり得るような実践的で自己発信のできる外国語運用能力を備えた人材を育成する方法です。従来の訳読中心の教授法ではなく、「聞く、話す、読む、書く」の4技能を総合的に伸長させる高度な外国語運用能力を身につける斬新な「教養主義的実用主義」の外国語教育の実施です。この教授法を実施して以来、卒業生の多くがそれぞれの分野において大学でマスターした外国語を駆使して活躍しています。

「役に立つ外国語教育」を旗印にし、4年間の大学生活のなかで何時でも外国語が学習できるカリキュラム編成を工夫しています。基礎外国語は必修科目として、基礎Ⅰと基礎Ⅱに分け、週に2回の授業を行います。中級外国語は選択必修科目ではありますが、科目を4科目に増やし、徹底して外国語表現能力を身につけてもらいます。できる限り学習者個人の個性を生かした教育に力を入れています。現在中級で勉強する英語の学生は3,500人、第2外国語の学生は1,200人を超えています。さらに、上級に2科目を設置しています。そのほか、「国際言語文化科目」という副専攻科目、チューター制度、学習相談アワーなどを設けています。年に一度、2泊3日の外国語合宿も行っています。常に外国語で話すチャンスを与えるよう、正課の授業はもちろんのこと、授業以外でも継続学習ができるよう心がけています。

文化としての外国語教育は非常に重要です。甲南大学の中級外国語教育のカリキュラムの中には、

言語のほかに文化、政治、経済、生活習慣などを学習する「言語と文化」と「国際理解」の科目を設置して、国際理解教育、異文化理解教育、人権教育などを取り入れています。地球のグローバル化に伴い、多様な文化、価値観を持った多種多様な民族と接する機会が急速に増えています。価値観が多様な社会で生きていくためには、自己とは異なる多様な文化、価値観を正しく理解して、相手を尊重する必要があります。自文化中心から脱して、異なる民族の価値観、人格を尊重する教育は外国語教育の一環として重視していかなければなりません。なぜなら、人権教育にもつながり、国際社会を生き抜くために不可欠は資質となるからです。

教育目標を設け、その目標を達成するために、教授法の改革、カリキュラム編成の工夫、国際理解教育、異文化理解教育、人権教育などを導入する甲南大学国際言語文化センター。ここで学んだ卒業生に、国際関係の仕事に従事する人が多いのは必然的な結果でしょう。今後もさらに学習者個人の個性に応じた外国語教育の機会を提供するようなカリキュラムを充実していき、学習者に「外国語運用能力」という付加価値をあたえていきたいです。

## 海外で働く先輩達から学ぼう

### —人間の連帯感と外国語の意義

国際言語文化センター教授 中村 耕二

外国語を学習する最終目的は決して試験の成績ではありません。それは到達度を測る一つの通過点であり、その後も、外国語を学び続け、使い続けることで、世界が広がり、人間関係も豊かになるものです。今回は海外で国際英語を使って活躍している三人の卒業生を紹介しましょう。外国語を学ぶことの意義が少し見えてくるかもしれません。

最初に、法学部の卒業生の宮田（徳岡）有佳さんを紹介します。有佳さんは英語の中・上級科目を履修し、特に国際理解の講義に2年間も続けて参加した真面目で控えめな学生でした。卒業後は提携大学である英国のリーズ大学大学院で開発教育の修士号を取得しました。大学院時代、フィールドワークでナイロビの国連機関で半年間ボランティアをしました。その後、東京に本部のある国際NGO JOICFPに勤務し、開発途上国の女性の健康を守るために国連機関と連携して支援活動に努力されました。その後、ケニアのナイロビからの強い要望で、長期にわたり国際NGOのAMDA Internationalで活躍されていました。「多様性の共存」を理想としたAMDAの支部が世界30カ国にあります。災害発生時に多国籍医師団を構成して医療支援を行うためのネットワークです。現在はJICAケニアのナショナルスタッフとして活躍されています。

最近の有佳さんからのメールの一部を紹介します。『昨年、ナイロビのスラム街の住民を対象にHIV/エイズに関連するカウンセリングや治療などをも行っている診療所に勤める夫と結婚し、長男を出産しました。今はJICAプロジェクト（水・インフラ・保健・医療分野）の専門家が働くJICAケニア事務所の総務課に勤務しています。忙しい毎日ですが、とても充実しています。』

大学時代、英語の授業で、有佳さんが緊張して真っ赤になり、小さな声で“My dream



JICAケニアのナショナルスタッフとして活躍する宮田（徳岡）有佳さん 法学部卒

is to work for the people in poverty.”と言った言葉を今も忘れることができません。夢は見ることで実現するものであり、夢の実現のために継続した努力をすることの価値を彼女から学びました。人間は教育を通して、変化し、想像以上の力を発揮するものです。

次に、NPO法人『かものはし』プロジェクト・サポーター事業部 キャンペーン事業 マネージャーとして活躍中の岩澤美保さんを紹介します。大学時代、国際協力の授業でタイの児童買春の問題の深刻さに衝撃を受け、もっと世界の抱える問題について知るために、英国Leeds大学へ留学され、開発学とジェンダー学を専攻されました。2006年春、児童買春の増加率が高いカンボジアで児童買春問題の解決に取り組むNPO法人『かものはし』プロジェクトに勤務されました。かものはしプロジェクトは、単に「寄付をあげる」のではなく、カンボジアでビジネスを起し、貧しい人に雇用を提供する「自立」を重要視している団体です。岩澤さんは文学部の4年生の時、米国の大手航空会社に内定しましたが、卒業寸前に、「裕福なビジネスクラスの乗客に奉仕するのもいいが、自分の人生をもっと貧しく脆弱な立場にいる人たちのために使いたい。」と悟ったと語っておられます。岩澤さんは航空会社の内定を辞退し、当時25歳の女性代表を中心に15名の若者が運営するNPOに新卒で入社しました。



NPO法人『かものはし』でカンボジアの子供を支援する岩澤美保さん 文学部卒

彼女の大学時代を振り返ると、英語基礎Ⅰ、英語中・上級、中国語、国際理解などのクラスを受講し、現実社会の不公正を真剣に考え、意見を発表する学生でした。特に国際協力に関心を示し、9.11、女性差別、南北問題等を学び、「自分には何ができるだろう」と真剣にメモをとり、質問をしていました。その時の学びが、現在国際協力に対する彼女のモチベーションを高めているようです。今、岩澤さんは、ハンディクラフト製品の日本販売や現地プロジェクト資金のファンドレイジング、広報を担当しています。現地の児童買春・人身売買の問題解決のため、日本に心の通った寄付や慈善の文化を根付かせ、日本の企業や市民が参加できる支援モデルを構築する努力をされています。

岩澤さんを国際理解の授業に招聘した時、「世界の問題を知るアンテナを広げ、これだ！と思える自分の情熱を見つけてください」と、熱く語ってくれました。

最後に、現在、EU圏内のフランス甲南学園トゥレーヌで高校3年生の担任をし、日本人の学生には英語を教え、フランス人の学生には日本語を教えている浦崎和香さんを紹介します。現地の高校は英語・フランス語・日本語の3つの言語を同時に学ぶ「多言語主義教育」を目指しています。フランスで働くためにはDELF・DALF（フランス文部省認定フランス語資格試験）が要求されます。浦崎さんは最新の外国語教授法を生かし、日本人学生やフランス人学生を心から支援しています。浦崎さんは学生時代、すべての英語の中上級のクラスを履修し、常に前向きに授業に参加していました。3年生の時にはイリノイ大学へ1年間交換留学しました。常に学び続ける姿勢のある浦崎さんは英語検定1級、TOEIC（905点）を達成し、卒業後は大学院に進み英語教授法（TEFL）の資格、言語学の修士号、高等学校・中学校教諭専修免許書（英語）、さらに養護学校教諭免許書も取得されました。

最近ではフランス甲南学園トゥレーヌの高校生が社会科の授業で米国のオバマ大統領へ英語と日本語で平和を願う手紙を書いて送りました。平和の出発点である広島・長崎にオバマ大統領自らが訪れることを依頼する手紙で、浦崎さんが学生の英語を指導しました。浦崎さんは、国際英語、日本語、

フランス語を使って、コミュニケーションの喜びを現地の高校生やフランス人学生に与えています。外国語教育は人間教育であり平和教育であることをフランスで実証しておられる浦崎先生の今後の活躍を願っています。

以上、甲南大学の卒業生達が外国語を生かし、世界を舞台に他者のために日々働いている姿を紹介しました。三人の先輩に共通していることは、学生時代から心を込めて外国語を学び続け、国境や文化を超えて、コミュニケーションの手段として外国語を使う努力をされていることです。日本にいる我々も先輩

の生き方から学ぶことが多々あると思います。先輩達に続いて、文学部4年生の橘田奈苗さんが来年の6月からJICA青年海外協力隊員としてアフリカのマダカスカルへ2年間赴任します。私も教師として、授業内容を世界とリンクさせ、英語で授業をしています。留学生のための「Japan Studies」やJICA国際センターで途上国からの研修生の講義「Culture and History」も英語で進めています。決して流暢な英語ではありませんが、国際英語で世界の人々と語り合い、学び合うことで、多くの出会いと発見があります。そこに**人間の連帯感**が育まれます。外国語を学ぶことで、**自分のHome**や祖国が見え、日本を一層愛する気持ちも増してきます。世界のどこかで、新たな友情を育み、**もう一つのHome**を意識することも可能です。外国語というものは、学び続け、楽しく使うことで、心が開かれ、世界の友という人生の宝を運んでくれるものです。“Use it or lose it”



フランス甲南学園トゥレーヌ高校3年生担任の浦崎和香さん  
文学部卒

## ドイツで働く先輩、日本で ドイツ語を活かして働く先輩達

国際言語文化センター准教授 柳原初樹

今回は、ドイツで働いている皆さんの先輩と日本でドイツ語を使って活躍している先輩の活動や就職の経緯を紹介しましょう。今回は二人の先輩に焦点を絞りました。

一人は、2007年度経済学部卒業生の柏木彩也さん、もう一人は2006年度文学部歴史文化学科卒業の明石雄平君です。二人に共通するのは大学に入って初めての外国語としてのドイツ語を学び、2年生の夏にドイツのライプツヒ大学で開講される海外語学講座ドイツに参加して、ドイツ語やドイツに対する関心が強まり、3年生の夏から1年間ドイツのフンボルト大学へ留学した点です。

柏木さんは現在、ドイツ最大の日本企業の進出地デュッセルドルフ近郊のゾーリンゲン（刃物で有名）にある日本企業Kai Europeという会社で働いています。本社は日本の貝印株式会社で、創業100年以上の、刃物やキッチン用具、アウトドアナイフ、医療用メスなどを製作・販売する会社で、アメリカ、アジア、ヨーロッパでマーケティング展開をしている会社です。ヨーロッパでは、EU統合に伴い、食文化の多様化、深化の中で、多くの三ツ星や二ツ星レストランのシェフ達が日本の伝統刃物の繊細な切れ味、しなやかさに注目し、愛用してくださっているそうです。また、美容院のヘアデザイナー達も、日本の理容バサミの良さに注目しているそうです。週末の見本市(メッセ)では、ドイツ国内だけでなく、パリ、ミラノ、モスクワ、ストックホルムなど、ヨーロッパ中を訪問しているそうです。

昨年の10月に彼女から頂いたメールの一部を紹介します。

「現在ドイツで働き始めて四ヶ月が経とうとしています。大学に入学して第二外国語としてドイツ語を始めた時には、まさかこんなにドイツに魅かれるとは自分でも思っていませんでした。在学中にドイツに一年留学し、多くの人々と交流し共に過ごすうちに、言語を学ぶことの楽しさを感じました。国や文化は違ってもお互いに理解を深め、得られた友達は今でも宝物です。帰国前には、日本の企業の現地法で二ヶ月間インターンシップをし、ドイツで働くということを経験しました。

帰国後将来に悩みながらも、周りに流されるように就職活動を始めましたが、ドイツと全く関係のない仕事に就くことに自分自身納得できず、再渡独を決心しました。再渡独の決心をしたものの、まずどう手をつけ始めたら良いのか分からず、闇雲に時間ばかりが経ち、周りから取り残されてしまったような焦りや将来への不安が募るばかりでした。卒業してから半年が過ぎた時、不安を追い払い再渡独へのモチベーションを高めるために、もう一度ドイツでの語学講座に一ヶ月だけ参加しました。その時に以前インターンシップをさせていただいた事務所を訪問し、思いがけず現地採用のお話を頂きました。そんなチャンスがやってくるとは思ってもみなかったのが大喜びだったのですが、ここからが本当のスタートであり大変でした。」

「ここで私が現在勤めている会社を少し紹介したいと思います。この会社は日本の刃物メーカーの現地法人で、家庭用品から業務用特殊刃物及び医療器具を一九八一年からヨーロッパにおいて販売しています。日本では現在でも日本製品よりもSolingenの刃物の人気が高いですが、現在ヨーロッパでは日本食ブームまた食のグローバル化という影響もあって、日本製に対する関心・評価が非常に高く、毎年業績を大きく伸ばしています。従業員30人のうち大半はドイツ人ですが、他にもイタリア人、フランス人、ポルトガル人、トルコ人、アルバニア人等々、多彩でヨーロッパの縮図とも言えます。

社内の共通語は当然ドイツ語ですが、各国のメンタリティーの違いがあり、それが面白く毎日楽しく仕事をしています。私の主な仕事の内容は、当然日本語ができるということから、日本の本社とのパイプ役という大事な役割を任せてもらっています。経験不足から失敗は多々ありますが、日本の本社及び現地の同僚の皆様のサポートを得て何とかこの仕事をこなしております。国民性の違いから意思の疎通に苦労することもあります。仕事上のスキルのみならず、自己の表現力を磨きコミュニケーションの力を向上させていくことが、今後の課題と考えています。」

このメールを頂いてからは、はや1年。現地法人の社長さんが私の大学時代の先輩ということもあり、定期的にお会いしますが、柏木さんの働きぶりにとても満足し、感謝してくれます。今では、総務、財務、在庫管理面で実質的運営を彼女に任せておられるらしく、ドイツ人従業員始め、フランス人、



柏木さんが通勤に使っているBMW



柏木さんと同じくドイツで働く同級生達（法学部卒）と連休を利用して遊びに来た同級生（理工卒）オランダへの泊りがけドライブ旅行

イタリア人も彼女にドイツ語で報告書、依頼書を出し、彼女の決済がないと出張も出来ないそうです(笑)。

次は、日本で働く明石君です。彼は、甲南大学を卒業後に、大阪大学言語社会研究科中北欧コース修士コースに進学し、言語文化修士(2009年3月卒業)取得後に、日本MKB株式会社に就職されました。

仕事内容は、ドイツ語の通訳・翻訳で、会社がメルセデス・ベンツの車をドイツ・スイスから輸入して日本で販売しているのでドイツ及びスイスとの取引先と毎日のようにメール・電話で車の値段等を聞いているそうです。会社のホームページをドイツ語に翻訳したり、メッセでドイツに行くときに通訳として上司に同行しているそうです。ちなみに、就活は、「インターネットで転職のサイトでドイツ語をつかえる仕事を探し、この会社がたまたまドイツ語の通訳・翻訳を募集していて、それから会社に履歴書を送り、面接を経て採用された。特に車に関心があったわけではないが、面接から採用まですごく早かった」そうです。

以上、柏木さんと明石君を中心に紹介しましたが、お二人の他にも、ドイツで働いたり、日本でドイツ語を使って活躍している先輩はおられます。皆さんの将来の就活や留学にお役に立つことを願っています。

最後に、現在も法学部3年生がベルリンに留学中です、定期的に甲南大学の文化・アウトドア・サークルHPの会員連絡板で、生のドイツ事情を発信してくれています。関心のある方は、下記URLをクリックしてください。

<http://www.ibws-npo.org/ksk/>



## 「フランス語」と「英語」を使って〈国連職員〉として活躍する古我知晶さんへのインタビュー

国際言語文化センター教授 中村典子

甲南大学のOGで、現在、UNDP(国連開発計画)で「気候変動スペシャリスト」「環境プログラムアナリスト」として活躍中の古我知晶<sup>こがち・あき</sup>さんが、ゲストスピーカーとして「フランス語」と「国際理解」の授業に参加してくれました。フランス語と日本語の二言語で話された内容を再現します。

**Q：甲南大学在学中は、どのように外国語を勉強しましたか？**

古我知さん：私は文学部の英語英米文学科に在籍していましたが、最初、英語は全く話せませんでした。大学1年のとき、母と初めてヨーロッパに旅行し、行く先々で出会う人と片言ながら楽しそうに話す母の横で、私は会話に入っていくこともできず、悔しい思いをしました。大学3年

のとき、1年間休学して「英国留学」をする決意しました。日本人が少ないスコットランドのダンディー・カレッジの語学学校のコースを選び、「日本語は話さない」「英語をモノする」という決意で日本を後にしました。

**Q：帰国後、「フランス語」を勉強する気持ちになったのは、なぜですか？ 中級・上級のフランス語の授業に熱心に参加していましたね。**

古我知さん：英国にいたとき「英語だけでは駄目だ！ もうひとつ何か外国語を習得しなくては…」と実感することが多かったからです。友人たちは、母語以外に2つか3つの外国語を喋っていましたから…

**Q：卒業後、立命館大学の大学院で国際関係を専攻されましたね。**

古我知さん：甲南大学在学中に中村耕二先生の「国際理解」に参加したことで「<貧しい国の人々、移民として暮らす人々の役に立つ仕事をしたい>という目的意識が芽生え、立命館の院で国際関係学を専攻する道を選びました。大学院入試のための勉強はかなりハードでしたが、国際関係学の魅力に取りつかれて、本を読み漁りました。

**Q：フランスにも留学されましたね。そのときの経験について話してください。**

古我知さん：院に入学後、トウルーズ大学へ交換留学生として派遣されました。フランス語は、英語のように長く積み上げた基礎がない分、大変な努力が必要でした。ただ私には「国際関係の現場やアフリカの歴史を理解できるためのフランス語を身につける」という明確な目標があったので、「とにかく学ぶ、講義をきく、そして現場を踏む」に徹しました。午前中は外国人向けのフランス語の授業、午後は、フランス人学生向けの「アフリカ植民地の歴史」などを受講しました。また、「実践の場で使えるフランス語を身につけたい」という気持ちで、アフリカ系の移民支援のNGOに出向いて活動しました。

**Q：修士論文は、ドイツのボンで書かれたそうですね？**

古我知さん：はい。フランス留学から帰国してまもなく、「英語とフランス語の両方の言語を使用して業務をこなせる」ということが評価されて、院でインターンに選ばれ、「国連ボランティア」の本部、ボンのアフリカ・セクションへ派遣されました。ルワンダ人女性のもとで、西アフリカ向けのプロジェクトの運営を補助するために、書類の翻訳(英語⇄フランス語)やレジュメ作成、リサーチの仕事も任されました。ボンでは、修士論文の完成、国連ボランティアの業務の遂行、就職活動という三つの課題があり、平日はインターンとしての勤務に従事し、週末は修士論文に向かうという非常にハードなスケジュールでした。幸い、所属していたアフリカ・セクションの長の推薦を得て、現在のUNDPブルキナファソのポストに就くことが決まったのです。



母校（本学）でプレゼンテーションする古我知 晶さん  
（「国際理解」の授業にて）

**Q：現在の国連開発計画でのお仕事とその意義について教えてください。**

古我知さん：地球温暖化により最大の被害を受けるのは「最貧国」です。多少の気温上昇と降水量の減少が、農業中心の人々の暮らしを脅かし、国そのものを破綻させてしまう危険性さえあるのです。これが現在の西アフリカの現状です。私の勤務地のブルキナファソでは、気候変動の予測に必要な設備を整え、温暖化に適應するための農業や牧畜、再生エネルギーの有効利用などを推進することが緊急の課

題です。私たちは、2005年からブルキナファソの環境省と共同してこの問題に取り組み、現在までに約8億円規模のプロジェクトを立ち上げ、運営や現場の指導も行っています。ひとつの目的の下に、立場や人種の違いを超えて地球環境を守るための「モノ作り」に携わる仕事は、本当に楽しく、やりがいがあります。

Q：＜国連機関＞で働くための条件について、簡単に教えてください。

古我知さん：英語のほかに、国連公用語の言語（フランス語、中国語、ロシア語、スペイン語、アラビア語）の運用能力があること、特定の専門分野の「修士号」を持っていることが条件だとされています。修士号をもち、英語ができる人の数は、驚くほど多いのですが、「英語とフランス語の2ヶ国語で仕事ができる人」は、日本はもちろん、ヨーロッパでも、そう多くはないと思います。「フランス語もできる」という利点を持っていたことが、私が国連で働くことに繋がったと思います。

Q：最後に、後輩へのアドバイスをお願いします。

古我知さん：昔、ブルキナファソの環境大臣であった、私の現在のボスが言いました——「何かをしたい、という気持ちがあれば何でもできるんだよ」と。大学時代に出会った仲間で、国際協力の現場で働きたいという希望を持っていた友人たちは、現在、そのほとんどが夢を実現しつつあります。フィリピンの大学院を修了後、JICAでフィリピンのNGOの運営を任されている人、日本に英語を教えに来ていたイギリス人の友人で、インターンの経験を生かして現在BBCで働いている人など…〈自分が何をしたいのか〉〈どんなことに情熱を感じるのか〉を模索した上で、「明確な目標を持ち、その目標を達成するために100%の努力をすれば、叶わない夢はない」と思います。自分の可能性を信じて、夢の実現に向かって突き進んでください。

## 高屋さん・伊藤さんの歩む道

### —中国語でがんばる先輩たち

国際言語文化センター准教授 石井康一

- 立命館大学経済学部国際経済学科の高屋和子准教授は甲南大学の卒業生です。1992年甲南大学経済学部入学、96年甲南大学大学院の修士課程に進みました。98年に修士課程を修了し、大阪市立大学大学院経済学研究科後期博士課程に進学、博士課程在学中に1年半上海の復旦大学に留学しました。留学後の2002年から甲南大学で非常勤講師として基礎中国語Ⅰの授業を担当、その他神戸女学院、京都外国語大学の教壇にも立ちました。2005年に論文「中国の財政制度改革—経済発展と財政」で博士号を取得、2005年4月より立命館大学経済学部の専任講師、2009年4月に准教授になりました。現在立命館大学経済学部にて中国語・中国経済論・中国語資料を使った中国経済研究などの授業を担当し、国内格差の克服という課題に対し中国の財政制度はどのような役割を果たすのか、どのような財政改革が今後必要になるのか、農村経済を如何に活性化させるべきかを中心に研究しています。
- 高屋さんが大学入学当時、第二外国語はドイツ語・フランス語から選択することになっていました（第2外国語に中国語が加わったのは94年から）。そのためドイツ語を選択し、学部生時代は中国語の授業を履修しませんでした。3回生から高龍秀教授のアジア経済研究ゼミに所属し、アジア経済を研究していましたが、97年の香港返還を目前にした中国経済について研究する機会があり、中国に興味を持つようになりました。修士課程進学後に本格的に中国経済を研究することを決心し、中国語の勉強を開始しました。

○高屋さんはこう語ってくれました。「始めはNHKのラジオ講座などを聞きながら自分で勉強をしていましたが、独学の限界を感じ、高先生の紹介を通して胡金定先生と石井先生の授業を聴講させていただくようになりました。甲南大学での中国語の授業はとても楽しく、先生方の中国語の教授法からも多くを学ぶことができ、現在授業をするときの参考にさせて頂いています。博士課程に進学後、中国経済の研究と中国語のレベルアップのために、上海の復旦大学に1年半留学しました。帰国後に大学で学生に教えるために、もう一度中国語の文法や発音を勉強しなおしたこと、そして授業を通しての教育経験は、現在立命館大学で教育に携わるにあたって、大きな糧となっています。また母校甲南大学の教育に携わることができたのは、私にとって大変うれしいことでした。甲南の先生方から教えて頂いた中国語を基礎に、留学などで勉強を続けたおかげで、現在は中国に現地調査を行なうなど研究面でも中国語を役立てるとともに、立命館の学生の中国研修プログラムをアレンジしたり、実際に学生を引率して中国に行ったりなど、日本と中国の文化交流の一端に携わることができることにやりがいを感じています。」



吉林省吉林市郊外の農村を調査研究中の高屋さん（左から2人目）

○高屋さんから、甲南大学の後輩である皆さんへのメッセージです。

甲南大学在学当時は、自分が将来大学の教員になることが出来るなんて思ってもいませんでした。ただ、目の前のことを一つ一つ私なりに一生懸命やってきたこと、そして周りの先生方はじめいろいろの人々に支えられてここまで来ました。皆さんもこれから様々な「壁」に直面すると思いますが、あきらめず一步一步前に進んでいってほしいと思います。

○伊藤まほさんは経営学部2004年卒業。2001年に海外語学講座に参加、西安の西北大学で4週間中国語を学びました。3回生の時にハルビンの黒龍江大学に1年間留学しました。卒業後、(株)ダイキンに就職、北京・上海の見本市に出張するなど中国語を生かして活躍、2007年8月からは、会社の研修制度で、研修生として蘇州の工場で半年、上海支社で1年、北京支社で2カ月勤務しました。女性社員の中国派遣は、社内で2人目のことだったそうです。北京オリンピックの期間は北京に詰めて、北京支社スタッフと一体でお客様をもてなす企画を練って実行に移し、寝る時間も取れないような忙しさでした。2009年に帰国、現在は大阪支店で油機事業部に所属、おもに海外営業事務に携わっています。



2007年の海外語学講座（西安・西北大学）に蘇州から飛行機で後輩の激励のために駆けつけてくれた伊藤さん。西安照相館にて民族衣装で記念写真。

○伊藤さんはこう語ってくれました。

中国で働いていて痛感したのですが、日本人の発想はどちらかというと「如何に会社に貢献するか」であるのに対し、中国人は自分自身をスキルアップさせることを第一に考えます。私は最近オフの時間に会計に関する資格を目指して勉強を始めました。今の状況に満足することなく、常

に自分を向上させ続けることが、中国語の学習に限らず大切なことだと思います。

○中国語を使って自分の道を切り開き、社会で活躍する甲南大学の卒業生はたくさんいます。関心のある人は月曜お昼休みの中国語学習相談アワー（6号館5階、中国語韓国語学習指導室）のときに私を訪ねて来て下さい。また2010年度から、中国語圏の大学との交換長期留学の制度がスタートします（詳しくは国際交流センター事務室に問い合わせして下さい）。それぞれの個性で輝いている先輩たちを見習って、あなた自身の進む道を選択し、大胆に前進しましょう！

## 甲南大学で学習した韓国語を 仕事に生かしている先輩たち

国際言語文化センター准教授 金 泰 虎

今回、上記のタイトルのもと、甲南大学で韓国語を学習した先輩たちが、社会に出て仕事に韓国語を活かし、どのような活躍をしているのか紹介します。そこで、まずお断りしておきたいのは、個人情報保護のため、実名は避けてイニシャル文字でもって記していること、また紹介から漏れている多くの先輩たちがいることも、ここで付け加えておきたいと思います。

まず、甲南大学で韓国語を学習して活躍している先輩たちは、「本格的留学派」・「長期留学（1年間派）」・「夏期講座派」・「国内派」の4つに分けて考えることができます。

一つ目の「本格的留学派」ですが、卒業後、韓国に留学したケースと定義します。例えば、Kさん（女性）は韓国に留学して日本で大学院を修了し、今は日本の大学で韓国語を教えています。そして、Tさん（女性）は韓国の大学院を修了して、今は日本に戻り、通訳や翻訳の仕事に従事しています。時々、ゲストスピーカーとして招待し、後輩に講義をして頂いています。「本格的留学派」の活躍の場は日本に限らず、逆に韓国で仕事をしている先輩もいます。Tさん（女性）ですが、留学経験を経た後、現地の韓国の高校で日本語教師として活躍しています。このTさんは、韓国で長期留学（1年間）している甲南大学の後輩に、いろいろとアドバイスをしてくれるありがたい存在です。

二つ目の「長期留学（1年間派）」は、姉妹校の漢陽大学校に交換留学生として行ってきた先輩たちです。Iさん（男性）は、韓国語の能力が買われて大手電機メーカーに就職し、韓国支店での勤務を目指しています。なお、日本に韓国のファッションを取り入れようとするHさん（女性）は、日本で韓国ファッションの店を開業するため、卒業後、デザイン専門学校に通いながら韓国を行き来しています。

三つ目、つまり夏休みの間、韓国で行われる夏期講座に参加した先輩の「夏期講座派」の中で、Oさん（女性）はJAL（日本航空）に勤務をしています。なお、Nさん（男性）は大手旅行会社の韓国担当として活躍しています。

四つ目の「国内派」、つまり留学や夏期講座などの経験はなく、コツコツと日本で韓国語を勉強し続けて力を伸ばして、その語学力を発揮している先輩を指します。例えば、運輸会社の仕事に携わっているTさん（男性）は、物流の関係で韓国を訪問したりし、また今は地域の韓国語教室での世話人の役割まで果たしています。他にもKさん（女性）はKAL（大韓航空）に勤務しており、Nさん（女性）は旅行会社で韓国関係の仕事を扱っています。特に、Nさんは個人的に韓国を頻繁に訪ねて、広い友人関係を構築している先輩です。

ところで、甲南大学では面白い現象も起きています。それは、卒業した先輩が、国際言語文化センターが開設している土曜日の社会人講習会に学びにきていることです。その中で、特にOさん（女性）

はイギリスに留学した経験があり、英文専攻の修士まで終了した後、韓国に留学するため学部の授業まで聴講して、韓国へ2年間渡りました。今は日本で情報関係の仕事に従事しています。他にも甲南大学の卒業生ではないものの、社会人講習会の受講者の中には、学部の授業も聴講生として受講し、その後、韓国に留学した人が3人もいます。それぞれ、韓国で経済や福祉、病院関係の勉強をして戻り、日本で活躍しています。要するに、これらのケースは、5つ目の「社会人派」と分類することができると思います。

概ね韓国語を活かして活躍している先輩たちを紹介しましたが、甲南大学における韓国語は、第2外国語であるため、韓国語専攻学科のある大学と比べて、卒業単位として認められる単位数が限られています。なお、基礎・中級・上級科目以降、つまり実力のある学生がさらに学習できる科目が設けられていないことも指摘せざるを得ません。しかし、韓国語を学習して活躍している先輩たちは、このような環境のもと、たくましく成長し、社会に出て韓国語を活かしながら自分の領域を開拓しています。

ちなみに、韓国の大学と比べると、日本の外国語学習の環境には大きな差があります。韓国では、すでに高校の時から第2外国語が必修科目として定められており、大学に進むとほとんどの学生は、夏休みの間、現地に第2外国語を学びに行きます。日本にも多くの韓国人学生が来ていて、熱心に日本語を勉強しています。よって、日本において韓国語が堪能な日本人学生が必要とされる仕事に、日本語の堪能な韓国人学生が就いて活躍しているケースが多いのです。

韓国語が第2外国語であっても、指摘してきた点の改善があれば、今後、さらに多くの学生が躍進し、紹介できる活躍ぶりもより多くなっていくことでしょう。

## 留学体験を生かした先輩たち

国際言語文化センター日本語特任講師 富 阪 容 子

甲南大学に留学してくる学生たちは大学の2回生や3回生が多いですから、日本語のレベルはまだです。留学期間はわずか1年に過ぎません。日本語力がどこまで伸びるかは人によって違います。しかしながら、日本で得られる経験のすべてはほとんどの留学生にとって忘れがたいものとなるようです。帰国すると同時に、また日本へ戻るチャンスを何とかして手に入れたいと模索し始める人が多いです。日本語を使いながら人々と接することで得られた充実した経験をまたぜひとも得たいと渴望しています。

次に、一人の元留学生を紹介したいと思います。2003～2004年にイリノイ大学から留学してきたグラム・ニュービック (Graham Neubig) さんです。彼は国際言語文化センターで開講されている日本語コースを受講しました。1年間の留学が終わると帰国しましたが、イリノイ大学工学部を卒業すると、JETプログラム(The Japan Exchange and Teaching Programme)に応募して再来日しました。JETプログラムの中には日本の小中高で語学指導の仕事をするALT (Assistant Language Teachers) と国際交流活動に従事するCIR (Coordinators for International Relations) とがあります。彼は最初の1年間は但馬農業高校で英語教師として働きましたが、次の2年間は兵庫県庁で国際交流員として勤務しました。その2年間には通訳や翻訳などの仕事を頼まれることが多かったと言います。その経験がきっかけとなって、コンピューターを利用することにより通訳や翻訳をたやすくする技術を獲得するための研究に取り組むことになりました。現在は京都大学情報学研究科で知能情報学を専攻して修士課程2年目を迎えているところです。甲南大学に留学中はまだ初級日本語しかできなかったニュ

ービックさんですが、当時から努力家だった彼はあらゆることに挑戦しながら、さまざまな関門を乗り越えて現在のように研究活動が可能となる言語能力を身につけたようです。日本語能力試験を受験したり、スピーチコンテストに出場したりしたのはもちろんです。彼のホームページを見ると、日本語を勉強している後輩たちへのアドバイスを始め、研究活動を進めるためのノウハウ等が日英の2カ国語で掲載されています。現在、甲南に留学中の後輩たちにもぜひ紹介したいものです。彼の将来はさまざまな可能性に満ちているように思われます。研究活動を継続して研究者としての道を歩んでいくことと期待しています。

留学生の日本語教育に携わっている私は、現在留学中の学生たちのことに最大の関心がありますが、コース修了後の彼らの様子や活躍ぶりにも大いに関心を持っています。甲南留学が彼らの人生にいかなる影響を及ぼして将来の方向性を決めるために作用したのでしょうか。ネットを活用できる環境が整ったので、以前より国境を越えて交流を進めることが容易になりました。そのおかげでずいぶん以前の留学生とも再び縁がつながることが可能になったのは喜ばしいことです。ちょうど20年前にハワイ大学から甲南にやってきた留学生のジョーンズ・ブレント (Jones Brent) さんとも旧交を温めることができました。現在の彼は2009年4月に西宮に創設されたCUBE (マネージメント創造学部) の教授になり、語学力を生かして経済学を教えています。自然な日本語で穏やかに話しかけてくれるジョーンズさんは「CUBEの学生たちはどんな高い要求にも応えようとして努力してくれるので、自分の仕事はやりがいがあり楽しい毎日です」と言います。そんな言葉を聞くと、私もうれしく感じずにはいられません。20年を経過した今になっても甲南との縁がつながっている人がいることは実にありがたいことです。彼と話すたびに、昔の日本語教室の様子がありありと思い出されます。楽々と日本語を習得しているようには見えませんが、いつも笑顔を接してくれたことが今もなお印象に残っています。当時のクラスメートたちは今世界のどこで活躍しているのでしょうか。ブレントさんのようにやはり今でも日本や日本語との関係を保ち続けているのではないかと思います。自分を最大限に生かせるような良い仕事に恵まれていることを願っています。世界的に不景気が叫ばれている現在では世界中のどこでも良い仕事を見つけることは容易なことではないようです。上記のニュービックさんが参加したJETプログラムに応募しても採用されなくてがっかりしている人も増えています。また元気を取り戻してがんばってチャレンジしてもらいたいです。

2009年9月にもフレッシュな43名の留学生が来日しました。彼らの前途にはどんなことが待ち受けているのでしょうか。最近では甲南留学生の先輩からアドバイスを得てから来日する留学生が多くなってきました。直接出会って話す場合もあればブログなどで出会う機会もあるでしょう。ある海外の大学では毎年毎年新しい留学生が来日するにあたって「甲南同窓会」(Konan Night) を開いてくれます。そこにはいろいろな時期に甲南へ留学した先輩たちが集まって今から行く後輩を励ましてくれるのです。私が知っていることはごくわずかなことに過ぎないでしょうが、実は知らないところで様々な人々や先輩たちが支援してくれているのです。だからこそこれまで継続してこられたプログラムだと思います。今年の留学生たちも日本語や日本文化について学ぶと共に、それぞれの個性によって多種多様な体験をして、多くの収穫を得てもらいたいと期待しています。彼らもいずれは先輩となって後輩を送り出してくれることになるでしょう。